

本科 1 期 4 月度

解答

乙会東大進学教室

早慶大日本史



1章 室町幕府の成立

問題

■確認問題

- 1 細川氏・畠山氏・斯波氏 2 所司 3 足利基氏 4 上杉 5 奉公衆
6 山名氏清 7 太政大臣 8 刈田狼藉取締り権 9 守護請
10 A 鎌倉 B 鎌倉 C 承久・源頼朝・得宗専制政治
11 D 美濃 E 守護

【1】

■解答

問1 足利尊氏 問2 源頼朝 問3 得宗専制政治 問4 京都

■解説

問1

建武式目は、足利尊氏の時に制定された。実際には、中原章賢（^{ぜえん}是円）と真恵の兄弟や、『庭訓往来』の作者といわれる玄恵らを加えた8名が作ったもの。全17条で、当時の社会情勢に即した内容となっている。『御成敗式目』などの法とは異なり、施政方針といったものと考えられる。

問2

右+幕下。源頼朝は右近衛大将であったことに注目。「幕下」は、近衛大将の唐名。

問3

「驕を極め欲をほしいまま」にした政治とは、単に鎌倉幕府の政治ではなく、鎌倉末期における、得宗とそれととりまく御内人による得宗専制政治をさす。

問4

以前に政治が行われた鎌倉ではなく、これから足利尊氏が幕府を置く京都でも、ということ。

【2】

■解答

問1 う・お 問2 う・お 問3 い・え

■解説

鎌倉期の守護、室町期の守護大名に関する問題で、5つの選択肢の中から2つの誤文を選ぶ問題である。

問1

う 『貞永式目（御成敗式目）』に定められた守護の役割としては、大犯三カ条の他、国内の武士の統制、治安維持があるが、年貢の徴収は地頭の役目であった。

お 北条氏一門によって全国の守護職が独占されていくのは、元寇の後のことである。

問2

う 実力で強引に稲を刈り取る行為は「刈田狼藉」という。刈田狼藉を取り締まる権限を、足利尊氏が守護に与え、守護の権限を拡大したのは、1346（正平元・貞和2）年のことである。お 室町幕府を支えた足利一門には、細川氏・斯波氏・畠山氏などがあるが、渡来人系の大内氏は、足利一門ではない。

問3

い 鎌倉府の支配範囲は関東8カ国（相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野）に甲斐・伊豆を加えた10カ国であり、2代の鎌倉公方足利氏満うしみつの時には、陸奥・出羽が加えられた。関東管領には南北朝期後半頃から上杉氏が世襲で就任するようになった。長尾氏はその上杉氏の被官。

え 永享の乱は、鎌倉公方の足利持氏と將軍足利義教の対立から起こった。足利義教が赤松満祐に滅ぼされたのは嘉吉の乱である。

【3】

解答

問1 懐良親王 問2 北畠親房 問3 大内裏の造営 問4 楠木正成

問5 綸旨

問6（解答例）大内裏造営事業などの負担は農民を疲弊させ、先例・家柄を無視した人材登用や法令の朝令暮改は公家政権の復活を望む貴族と新たな棟梁を求める武士の双方から不満を買った。（80字）

解説

問1

後醍醐天皇は、各地に自らの皇子を送って全国支配を貫徹しようとした。征夷大將軍に護良親王もりよし、陸奥將軍府に義良親王のりよし（後の後村上天皇）、鎌倉將軍府に成良親王なりよし、そして、九州に遣わしたのが征西將軍の懐良親王かねよしである。南北朝の内乱期にも、九州では菊池氏などの支持を受けて南朝は勢力を誇った。

1368（正平23・応安元）年、中国で朱元璋（洪武帝）が明を建国すると、倭寇の禁圧と臣従を求めて大宰府にたびたび使者を派遣してきた。懐良親王はこれを受け入れ、「日本国王良懷」として冊封を受けたことが、明の史料に見られる。明側が交渉相手として懐良親王を選んだ事実は九州における南朝方が強勢であった時期が確実に存在することを示している。

問2

歴史書『神皇正統記』を著したのは、北畠親房である。北畠家は村上源氏の系統につながる公家であり、親房は建武政権が崩壊すると後醍醐天皇を吉野に迎え、その後も南朝の重臣として各地を転戦した。『神皇正統記』は、1338（延元3・暦応元）年に常陸国小田城で後醍醐天皇の死の一報を聞いた親房が、跡を継ぐ子の後村上天皇（義良親王）のために執筆し、翌年献上した史書である。神代から後村上天皇までを記し、伊勢神道や宋学の大義名分論に基づいて南朝の正統性を主張したものであるが、後醍醐天皇の政策に対する批判も含まれている。なお、問題の史料の奏文を記した親房の子とは、北畠顕家である。陸奥將軍府で義良親王を補佐した。

問3

1333（元弘3）年、鎌倉幕府が滅亡し、京都に戻った後醍醐天皇は、翌1334（建武元）年に元号を建武と改めて新政を始めた。建武という元号は、25年に光武帝が漢王朝を復興した時のものである。後醍醐は、自らの権威を誇示するため、大内裏の造営や乾坤通宝の鑄造などを計画した。しかし、その負担は農民からの不満を買ったことが、史料「東寺領太良莊^{たらしょう}訴状」（『東寺百合文書』）からもうかがわれる。

問4

討幕をめざす後醍醐天皇の下には、武家政権の終わりを望む貴族だけでなく、幕府から離れた御家人（足利高氏・新田義貞ら）、在地支配権の承認を求める悪党など、様々な勢力が集まった。その1人が、河内国の悪党楠木正成である。正成は赤坂城・千早城などで幕府軍に抵抗、建武政権が成立すると河内・和泉の守護に任ぜられた。最後は1336（建武3）年に湊川の戦いで足利直義に敗れて死亡している。

問5

後醍醐天皇は、「今の先例も昔は新儀であった。私の行う新儀は未来には先例となるであろう」（『梅松論』現代語訳）と宣言し、まったく新しい政治体制をめざした。その時に用いたのが、^{りんじ}綸旨と呼ばれる天皇の発給する文書である。後醍醐天皇は、これを万能として、土地所有権の確認もこの綸旨ですべて行うことで、一身に権力を集中させた。

問6

後醍醐天皇がめざしたのは、天皇親政である。延喜・天曆の治を理想としており、後醍醐の諡号も醍醐天皇から取って自ら定めた（ちなみに、子も村上天皇からとって後村上である）。

但し、それは単純に古代の貴族の世への回帰ということではない。後醍醐天皇は幕府を否定し、院政も摂関政治も否定している。後醍醐天皇がめざしたのは、中世の公武二元支配の状況を脱して、公家も武家も自らの支配下に置くことであった。それは、各国に国司と守護を併置したことからもうかがえる。

だが、後醍醐天皇の下に集まった者たちの思惑は異なる。まず、貴族が望んだのは、公家政権の復活と本所領の回復であった。それゆえ、後醍醐天皇が家柄や才能に関係なく武士を登用したことに不満であった。一方、武士たちの望みは、新たな棟梁に自らの本領を安堵されることであった。しかし、これも綸旨によって踏みにじられることになる。武家社会の道理である年紀法（他人の所領でも20年間支配すれば所有権が認められるとする中世武家法の原則）は無視され、武士の不満も募った。さらに、問3で見た通り大内裏の造営事業などの負担で農民も疲弊し、不満を抱えていた。このように、後醍醐天皇の目標にだれもついていけなくなり、建武政権は3年足らずで空中分解したのである。

解答は、史料の内容も生かしてまとめたい。「諸国の租税を免じ、儉約を専らにせらるべき事」「任官登用はすべからく才知を撰ぶべし」「近ごろ朝に令して夕に改む」といった表現から、筆者の建武政権に対する評価を読み取ってほしい。

【解答のポイント】

- ①農民は大内裏の造営事業の負担により疲弊
- ②先例や家柄を無視した人材登用、法令の朝令暮改
- ③公家政権を望む貴族からも新たな棟梁を求める武士からも不満を買う

2章 室町時代の外交

問題

確認問題

解答

- 1 建長寺船 2 懐良親王 3 肥富 4 日本国王 5 寧波 6 足利義持
7 大内 8 宗氏 9 応永の外寇 10 綿花 11 尚巴志 12 十三湊
13 A 肥富 B 祖阿 問 足利義満

【1】

解答

- (1) (a) 応永 (b) 李成桂 (c) 2・3・5
(2) (d) 3 (e) 尚巴志 (f) 2

解説

(1)

(a) 応永の外寇おうえい がいこうについての設問で、和年号が問われている。従って答は応永でよい。この時期の日朝関係は応永の外寇(1419)→癸亥約条きがい かがい(嘉吉条約)(1443)→三浦の乱さんぽ(1510)という流れで押さえておいてほしい。癸亥約条は朝鮮側が宗氏の貿易船を制限した条約。また三浦の乱の三浦とは富山浦ふざんぼ、乃而浦ないじぼ、塩浦えんぼの3つの港(浦)をさす。この乱はここに駐留している日本人と宗氏とが朝鮮の貿易制限に対して起こした争乱である。日明貿易関連の寧波の乱と混同しやすいので注意。朝鮮との国交では対馬の島主で守護の宗氏が日本側の窓口になっていた。そのため宗氏は豊臣秀吉の文禄・慶長の役でも朝鮮と日本との間の交渉に当たっている。

(b) 10世紀の初め、新羅に代わって王建おうけんが建てた高麗こうらいが朝鮮半島を統一した。高麗はのちに元の属国となり、2度の元寇でも元軍に参加した。さらに高麗は前期倭寇の襲撃に悩まされるようになり、結局、倭寇の追討に功績のあった李成桂が朝鮮を建国した。李成桂は対馬の宗氏と連携することで倭寇を抑えようとしたが、一方で倭寇の本拠地と見なした対馬に征討軍を送った(応永の外寇)。

なお、その他のこの頃の朝鮮関係の人名では、豊臣秀吉の文禄の役、慶長の役で水軍を率いて日本軍撃退に活躍した李舜臣りしゆんしんも一緒に覚えておくとよい。

(c) いずれも中世～近世の外交関係で重要な事項であるが、ここから明との関係が深いものを選び出さねばならない。日明貿易関係から探っていくと、日明貿易を始めた3代將軍足利義満は容易に挙げられるだろう。ただ明に臣従するという義満の朝貢貿易には反発が強く、義満の死後、4代將軍の足利義持はこれを一旦停止した。その後貿易は再開されたが、室町幕府の権威失墜以降、貿易の実権は有力守護大名である細川氏と大内氏に移った。堺商人がバックにいる細川氏と博多商人を保護する大内氏は貿易の実権を争うようになり、1523(大永3)年に中国の港町寧波で両勢力が武力衝突を起こした。これが寧波の乱である。寧波は

明の貿易の拠点であり、いずれの遣明船もこの寧波に発着し、陸路で北京に赴くというルートを取っていた。

以上、足利義満、足利義持、寧波の乱が答えとなるが、他の用語に関して以下で説明する。

4. 足利尊氏は夢窓疎石の進言で天竜寺船を派遣した。天竜寺船の派遣先は明でなく元である。
6. 三浦の乱は朝鮮関係。前述の(a)を参照のこと。
7. 建長寺は北条時頼が宋の禅僧蘭溪道隆を招いて鎌倉に建立した寺（栄西が建てた京都の建仁寺と混同しやすい）。鎌倉時代末期にこれを再建するための費用を調達するために仕立てた貿易船が建長寺船（天竜寺船も同様な動機による）。したがって貿易相手は元。
8. 奉書船は江戸幕府初期の渡航制限政策の1つ。朱印船を制限し、かつ老中の影響下に置くのが目的。日本人が海外に渡航する際には、朱印状の他に老中が長崎奉行に宛てた奉書を持たねばならないというもの。したがって直接明との関係を示すものとはいえない。

(2)

琉球本島には11世紀末には^{あじ}按司と呼ばれる領主を中心にした村落規模の集団が次第に成立し、これらが徐々に統合されて14世紀中頃までに北山・中山・南山の3つの勢力にまとまっていた。この時期にこのような状況が琉球で起こったのは、東アジア全体の情勢の変化が背景にあった。日本でいえば平安時代初期より、日本・新羅・唐・渤海などの間で民間レベルでの交易が少しずつ始まり、唐が衰退し滅亡した後は東アジア諸国間で民間レベルの活発な交易が行われるようになった（これは別に唐が衰退しただけでなく、中国を初め東アジア各国内部で流通経済が進展したことも大きい。日本で平安時代末期～鎌倉時代にかけて、交易が盛んになっていったこともこの流れの中で理解できる）。日宋貿易・日元貿易もこのような動きの中に位置付けることができる。そして中国の江南地方と日本とを結ぶ交易路の途中にあったのが琉球諸島だった。琉球もこの動きの刺激を受け、その結果として国家形成への道を歩み始めることになる。なお、この時期の琉球の様子は『おもろそうし』などからうかがえる。

(d) 上で触れた北山・中山・南山の3つの勢力のことをさしている。

(e) 琉球本島を統一したのは中山王の^{しょうはし}尚巴志である。こうしてここに、都を^{しゅり}首里に置く琉球王国が誕生した。琉球は琉球諸島や先島諸島の各島を従え、明に積極的に朝貢することで交易関係を深め、東シナ海のちょうど中間に位置するという地理的な条件を生かして、中継貿易で繁栄した。しかし1609（慶長14）年の薩摩藩による武力制圧以後は、薩摩藩を通して幕藩体制に組み込まれ、將軍の代替わりに慶賀使を送るようになった。そして内政に至るまで薩摩藩の干渉を強く受けるようになったが、明や清との朝貢関係は依然として保たれていた。こうして途中で内部で王朝交替はあったものの、明治期の琉球処分で沖縄県になるまで琉球王国がそのまま存続した。幕末にペリーを初め列強の艦隊が日本を訪れる際にもこの地に立ち寄っている。

(f) 明の海禁政策の下で中国人商人が交易できないという状況（後期倭寇の担い手となる中国人が次第にこの状況を打破していく）は、東アジアの交易の上で琉球にきわめて有利な条件を生み出していた。琉球は明に頻繁に朝貢することで明政府との友好関係を作り出し、中国の絹織物や日本の刀剣や硫黄を仕入れて、これを南海諸国（いまの東南アジア諸国）に運び、代わりに香料や香木や染料などを手に入れて、これを中国や日本、朝鮮半島で売りさばくと

いう中継貿易で繁栄を極めた。日本での貿易拠点は博多と坊津^{ぼうのつ}（鹿児島県）である。

しかし16世紀にポルトガル人が東アジアに進出してくると貿易独占は敗れ、中国人による後倭寇や日本商人の進出（東南アジア各国に日本人町が生まれ、山田長政^{やまだながまさ}らが活躍）もあってその地位は衰退した。ただ江戸時代に入っても、東シナ海交易の中継点の役割は依然として持ち続けた。

なお、解答以外の3つの選択肢についても説明を加えておく。

1. 出會貿易は、政治的な要因などで直接に交易できない2つの国の商人たちが、第三国で「出會」って取引を行う貿易形態。例えば日本と明は南海諸国でこの出會貿易を行っていた。
3. 朱印船貿易は豊臣秀吉や鎖国までの江戸幕府がとった統制貿易の形態。貿易許可証である朱印状を持っている船のみが渡航を許された。とくに初期の江戸幕府は、ポルトガルの対日貿易の独占を破るために糸割符^{いとわっふ}制を導入して、日本人商人に積極的に朱印状を与えて日本人の海外進出を奨励する政策を採っていた。
4. 南蛮貿易はポルトガル人やスペイン人との貿易のこと。本来南蛮とは中国の華夷思想に基づく南方の異民族をさす呼称であるが、スペイン人やポルトガル人が東南アジアのマニラやマカオを拠点としていたために、彼らが南蛮人と呼ばれるようになった。日本での交易の拠点は長崎・平戸・府内（豊後）。

【2】

解答

- (1) (イ) (2) (ア) (3) (ウ) (4) (イ) (5) (ア) (6) (ウ)
(7) (イ) (8) (イ) (9) (ア) (10) (ウ)

解説

- (1)・(2)・(3)

天竜寺は、京都五山の1つ。足利尊氏・直義が、後醍醐天皇の冥福を祈るために建立した。開山は夢窓疎石。天竜寺の造営費を得ることを目的として、元に派遣した貿易船を天竜寺船という。なお、鎌倉時代には、天竜寺船の先駆けともいえる建長寺船が鎌倉幕府によって元に派遣されている。建長寺の再建費を得るのが目的。天竜寺船と建長寺船を混同しないように気をつけよう。

元寇のイメージから、日元間の交流がなかったかのような印象を受けるが、そんなことは決してなかった。鎌倉時代後期～南北朝期には、私的な日元貿易が盛んに行われていたことを覚えておこう。

- (4)・(5)・(6)・(7)・(8)・(9)・(10)

足利義満は1401（応永8）年、「日本准三后某、書を大明皇帝陛下に上る」で始まる国書を送り、禅僧の祖阿と博多商人の肥富を明に派遣した。その返書には「日本国王源道義」とあり、また、次に義満が送った国書では「日本国王源」^源と名乗った。中国では皇帝の下に王が位置付けられており、また、義満は自ら「臣」と名乗っているため、明に臣従し、それと引き換えに貿易を行う、いわゆる朝貢貿易の形式をとったのである。この日明貿易は勘合という割符を使用したのが勘合貿易といわれる。輸出品では銅・硫黄が、輸入品では銅銭・生糸が有名。また、書画や陶磁器など中国産の美術品・工芸品が持ち込まれ、唐物といわれ重宝がられた。貿

易はその後、寺院や守護大名などに担い手が移り、後半には堺商人・細川氏と博多商人・大内氏が競い合い、寧波の乱といわれる武力衝突まで発生し、乱後には大内氏が独占した。1551(天文20)年、大内義隆が、家臣の陶晴賢すえはるかたによって自殺に追い込まれ、事実上、大内氏が滅亡したため、勘合貿易は終了した。

3章 室町幕府の動揺と庶民の台頭

問題

■確認問題

- 1 足利持氏 2 赤松満祐 3 日野富子 4 樵談治要 5 関所
6 畠山政長・義就 7 柴田勝家 8 足かる 9 宮座 10 入会地
11 逃散 12 徳政 13 播磨 14 A 山城 B 下極上 C 平等院
15 富樫

【1】

■解答

- (1) 足利義持 (2) 足利義教 (3) 足利持氏 (4) 1438 (5) 1441
(6) 赤松満祐 (7) 足利義視 (8) 日野富子 (9) 足利義尚
(10) 山名持豊 (宗全)

■解説

- (1) 足利義持は足利義満の子で4代将軍である。その在職中に上杉禅秀の乱が起こったが、これを平定した。足利義満の始めた日明貿易を中止している。
- (2) 5代将軍足利義量よしかずが1425(応永32)年に病死したあと、将軍空位の状態であったが、1429(永享元)年に足利義教が6代将軍に就任した。義教は義円と称し、天台座主であったが、還俗して将軍となった。義量死後に実権を握っていた前将軍の足利義持は義量の後継者を決めようとしなかったため、大名らは義持の兄弟4人を候補者として鬪くじを行い、将軍に決定したのが足利義教であった。
- (3)・(4) 幕府に背く鎌倉公方の足利持氏を、1438(永享10)年に6代将軍足利義教が討伐軍を送って滅ぼしたのが永享えいしょうの乱である。足利持氏の自殺によってこの乱は終結するが、その子安王丸やすおう・春王丸はるおうは下野日光山に落ちのび、1440(永享12)年に下総ゆうきうじともの結城氏朝を頼って反乱を起こした。これが結城合戦で、幕府側の勝利に終わった。
- (5)・(6) 足利義教は「万人恐怖」と呼ばれるような専制政治を行ったが、1441(嘉吉元)年、播磨国の守護であった赤松満祐によって謀殺された(嘉吉の乱)。この背景には、義教による有力守護の弾圧に対して満祐が恐れを感じていたところに、義教が満祐から播磨国の守護職を取り上げようとしているというわさが流れたということがあった。
- (7)～(9) 将軍足利義政には男子がなかったので、1464(寛正5)年、弟の足利義視が養子となった。しかし、その翌年に足利義政の妻日野富子に義尚が生まれたことで、相続争いとなり、日野富子は義視の排斥を試み、これが応仁の乱を誘発する1つの要因となった。
- (10) 応仁の乱で日野富子と足利義視の側についた山名持豊(宗全)は、西軍の主将であったが、1473(文明5)年に陣中で病死した。

【2】

解答

- 1 尋尊 2 a 下剋上（下極上） b 平等院 3 畠山政長・畠山義就
4 大和国・奈良県
5 莊園領主の立場から一揆の要求を歓迎したが、天下のためにこれ以上の増勢を懸念した。

(40字)

解説

山城の国一揆に関する問題である。

- 1 『大乘院寺社雑事記』は興福寺大乘院門跡の尋尊・政覚・経尋の日記で、1450（宝徳2）～1527（大永7）年にわたる記録が残されている。問題として挙げられた箇所は尋尊による記録である。尋尊は当代一の学才といわれた関白一条兼良の子で、1456（康正2）年には興福寺の別当となっている。
- 2
- a. 下剋上とは下位の者が上位の者をしのぐこと。尋尊は、山城の農民が在地の小領主たちを中心に団結し、両軍の立ち退きを要求したということに対して、もっともなことであるとしながらも、これを下剋上の至りであると述べている。
- b. 1485（文明17）年12月の寄合に続き、1486（文明18）年2月、36人の国人が月行事となり、宇治の平等院において寄合を開いた。この寄合で山城の国中を統治するための掟を定めたこと尋尊は記している。
- 3 応仁の乱において、畠山氏内部では家督をめぐる畠山持国の養子畠山政長と実子畠山義就が争っていた。乱が一応終息した後も、政長と義就の争いは河内から南山城に場所を移して続いていた。
- 4 古市氏は大和の国人で畠山義就の被官であった。政長と義就の対立は、大和の有力な国人を二分する争いとなったが、中でも古市氏は南山城まで勢力を伸ばしていた。
- 5 史料中に筆者の感想が折り込まれている。「珍重の事なり」（結構なことである）、「凡そ神妙」（まことに感心なことである）、「但し興成せしめば天下のため然るべからざる事か」（但しこれ以上勢力が盛んになると天下のためにはよくないことになるのではないか）という箇所に着目すること。当時興福寺は大和一国を守護並みに支配していたから、尋尊はいわば一大莊園領主というべき立場にあった。その立場から、山城の国人らが両畠山軍の山城からの撤退、本所領の回復、新関の禁止を要求したことに対して評価を与えているのである。また、国人らが平等院で会合して掟を定めたことについても一定の評価を与えている。但し、このような一揆勢の動きが盛んになることに対して、領主階級としての憂慮も同時に抱いていたのである。

【3】

解答

- (1) A (2) C (3) C (4) B・C
(5) 村落の年貢の請け負い(10字) (6) 一揆

解説

- (1) 職^{しき}とは職務の執行が収益を伴う官職のことをいうが、職務に伴う土地からの収益権をもさす。荘園公領制の発展に伴って荘園・国衙領においても職務や職能が職によって体系化された。さらに荘園の場合には、有力者への寄進が積み重なり、職も本家職・領家職・預所職など複雑な階層をなしていた。
- (2) 荘園や公領の構成単位である名を経営し、年貢・公事を取りまとめる村落内の有力な百姓が名主であり、田堵の系譜をひく。村落内部での指導者的階層をなした。
- (3)～(5) 鎌倉時代後期から安土・桃山時代にかけて、主として畿内およびその周辺地域において見られた自治的村落は惣と呼ばれる。惣は住民の生産・生活を維持するための共有の財産として、草木灰用の草や薪などを採取するための入会地や、鎮守社などの田畑などを所有し、これを管理した。また惣では置文・掟と呼ばれる惣固有の成文法や慣習法があり、惣内部での生産活動や消費生活、他村との交流などに厳しい制限がなされていた。違反者に対しては制裁規定が設けられており、村落への警察権や裁判権を村民自ら行使する自検断も行われた。また領主に対して年貢徴収を請け負う地下請(百姓請)が行われる場合もあり、年貢総額・年貢率の固定化や年貢の減免を要求することもあった。さらに惣は住民の自治的な運営機関として宮座を持ち、氏神・鎮守の祭祀を運営するなど、惣の運営は宗教的活動とも結びついていた。
- (6) 一揆とは、目的・方法などを同一にする人々の結合と行動をさす。神仏に誓約して一味同心の集団を形成した。中世においては問題文中に挙げられているような村落農民の闘争の他、寺院における僧衆、中小武士の戦闘集団、また中世末には一向一揆などもあった。



| | |
|------|--|
| 会員番号 | |
|------|--|

| | |
|----|--|
| 氏名 | |
|----|--|